

トーヨー！

タマトナ 近ドキターハ 準備ロドリ、事ムタリ
ます。

さて、同封の奇妙なホ。実は二十二年以前に少しき
「るほどの記録です。当時の記録がどうかに残してあるが
どうかわからせんが、もしもあるなら一九七二年度春山記録(七三)
のあたりに加えておいて下さン。

花備などその後大きく改変が進んでいるのである。人間
食い物はまだ変わらんなー。どうが最も近の状況。

報告書を詳読しての感想です。

とちがく十倍以上無事でいい。このほか
予報によれば「平年並」との事。近頃「平年並」との事が田
水過剰向うがたのでアーロスもうしくなるかも一つか
せしむ。

再見！

川坂岳ハド押

95 郡走二十日
SACのとおへ

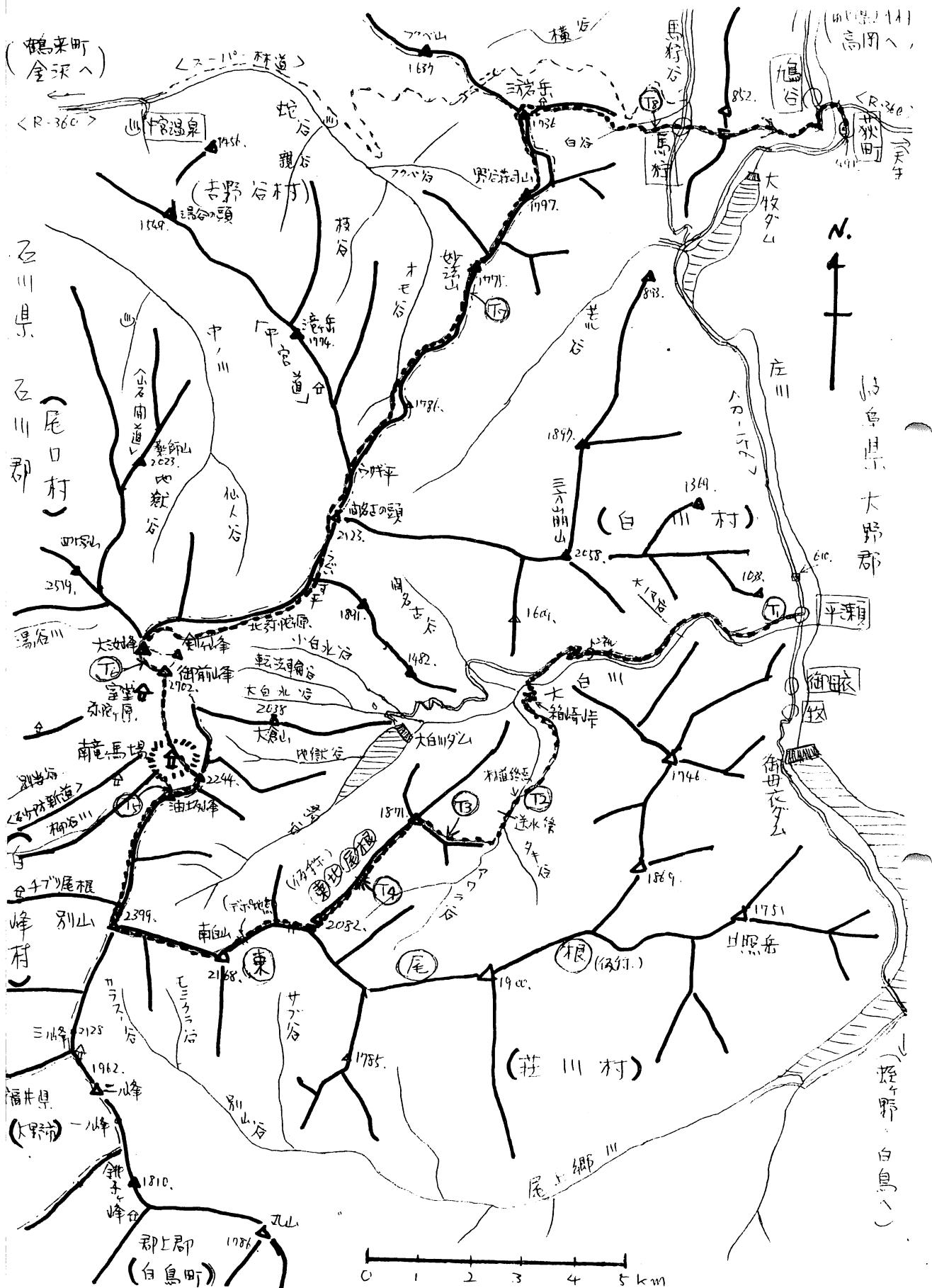
山行報告

春山白山縱走

1973年3月5日～3月17日



信州大学山岳会



△ (壳紙写真9=市野氏撮影)

加賀白山春季縦走 (1973年3月5日~3月17日)

信州大学山岳会

☆計画理念「雪を求めて」

当山岳会の山行対象は当然のように目の前にそびえる急峻な岩と雪渓の殿堂日本アルプスが中心になる。それは他の地域の人々から見ればうらやましい限りのせいいたくと言えよう。その穂高の稜線から毎年新人合宿の頃西の方を望むと雪が消えて黒く見える低い山並の向こうに一際白く輝く白山がたおやかに横たわっているのが目に入る。さほど高くはないがまわりに高い山がないので日本海からの冬の季節風をまともに浴びしかも火山特有のなだらかな地形のため多量の積雪が遅くまで残っている。日本アルプスとはまた一味違った、げっぷが出るほどの豊富な雪の中をただひたすらラッセルして、誰もいないあの神々しい頂に立ってみたいというのが今回のモチーフ。共に雪国育ちであるC.リーダーとS.リーダーの思い入れも少なからずあるのは事実だろう。

☆メンバー

市野 和雄(農学部所属4回生・越後高田出身) チーフリーダー、記録
三坂 健次(農学部所属3回生・加賀金沢出身) サブリーダー、渉外
牧瀬 敏裕(農学部所属1回生・武藏所沢出身) Essen、会計
尾崎 一紀(工学部所属1回生・下野小山出身) 装備、医療

☆ルート概略

松本→《中央線》→多治見→《太多線》→美濃太田→《越美南線》→美濃白鳥→《バス金名線》→平瀬(登山口)--《大白川林道》--アワラ谷出会--《アワラ谷》→別山東尾根の東北尾根△
1871.6南東支稜末端--《岐義》→△1871.6--《東尾根東北尾根》→東尾根との分岐点--
《東尾根》→別山→△2244→南竜ヶ馬場→御前峰→大汝峰→間名古の頭西→妙法山
→野谷莊司山→三方岩岳--馬狩--荻町→《バス》→美濃白鳥→《バス》→美濃市→
《知》→美濃太田→《太多線》→多治見→《中央線》→松本

☆装備

◇本来この山域なら山スキーを使うのがよさそうだが、メンバーが山スキーを十分こなしている者ばかりではないので今回は輪かんじきで歩く。ただし試みとして荷物を運ぶための組立式「そり」一台をスキーで作り持参した(実際にはあまり役立たなかった。)

◇ ブスが何度か詰まったのはタール状のものがノズルをふさいだため。分解してガソリンで洗ったら直った。どうやらガソリンを入れてあった4ℓ缶にオイルのようなものが少し残っていたらしい。

◇ 雪洞内の敷物としてはビニールシートのように完全防水の素材は下から濡れる心配がない反面、上からの水はたまるしツルツル滑って不安定。その点夏テンのグランドシートは、下に小枝や木の葉などを敷けるなら断熱性もあり居心地がよかったです。

◇ メインザイルはこのような山行では不要だと思う。

◇ 輪カンジキの爪が折れる事があったが、ほんとうに実用性にすぐれた良質のものがほとんど作られていない現在いかんともし難い。

☆食料

◇ 新しい試みとして納豆・みそ汁は好評だったが、どうしてもだめな人もいる事を考慮する必要あり。重要な蛋白源だけに工夫して欲しい。

◇ 飽きがこないよう心遣いされたペミカンの多種類化はよかったです。ただ春山では日当たりのいいザックの中はかなり温度が上がり変質する事もあるので、特に山行終盤は気を付けよう。

☆準備

3月3日 午後2時から買い物、部室でペミカン1なべ製造

3月4日 午前10時からペミカン2なべ製造、荷物分配、パッキング

☆行動記録

3月5日(月)松本→T1(平瀬登山口付近ツェルト)

7:35部室発(にわか雪12°C)→(タクシ-300円/4人)→7:45~8:21松本駅→(急行200円/1人)→11:15~13:00多治見(昼食、晴、13°C風力3西北西)→(普通列車)→13:30~:50美濃太田→(普通列車にて乗車券890円)→15:40~16:15美濃白鳥→国鉄バス(300+30円)→→17:05蛭が野(雪、積雪10cm北風力2)→17:25~:35牧戸→18:05平瀬登山口
林道を数十m入ったあたりをT1と定めツェルトを張る。雪0°C以下、積雪(旧10cm新15cm) 午後9時就寝

◆ 美濃白鳥からの国鉄バスの車掌さん(ひげのおっさん)はなかなかおもしろい人で、全くたいくつしなかった。この人は名古屋から金沢までの名金線バス路線(白川街道)沿いに桜並木を作ろうと私費で植樹を続けている佐藤さんという方。(謹:後にまだ若くして亡くなられた。)

3月6日(火)平瀬T1→T2(アワラ谷林道導水管手前750mあたりツェルト)

4:30起床、5:30~朝食(6:45ソリに荷物を積んで引いてみるが新雪がソリの前面にたまって抵抗が大きく断念=写真1)7:00発(雪、新雪30cm-5°C)→7:15~:20休→8:15~:30小屋横(雪、薄日-1°C)→9:25~:40L1大ノマ谷の少し先(雪-2°C)写真2→10:25~:35トンネル抜ける(雪-2°C)→11:30~:45L2、橋の手前(雪薄日3°C)→12:35~:45箱崎峠アワラ谷に入る(雪、途中5分程荷物分け)→13:30~:40標高1000mの平坦地に出る(雪、風力3北)→14:30~:45L3、橋の少し先(雪、風力2北西、-2°C)→15:30T2堰堤少し手前右岸テラスにツェルト張る

◆雪止まず。薄日ももれるが執拗に雪が舞う。入山日で荷が重いという事もあり、かなりきつい一日ではあった。今後は積雪も増えるし尾根に取り付けば傾斜も急だからもっとえらそう。

3月7日(水)T2→T3(支稜1650m付近S H)

6:50発(晴-8°C)→7:35~:45導水管下(快晴-6°C)→飛び石伝いに右左岸へ3回徒渉写真3→9:00~:30L1左岸の小尾根を乗っ越した河原(快晴2°C)→10:05アワラ谷標高1080m付近から左岸の目的の支稜に横から取り付く→10:35~:45支稜上に出る(薄曇り風力2北-1°C日暈)→11:25~:40L2→12:30~:40(高曇り)→13:35~:50L31500m付近(高曇り)→14:35~:40 1600m付近(高曇り)→15:00・1650m付近(支稜の枝尾根との分岐点)今日はここをT3とし雪洞を掘る(-5°C)

◆朝の内快適な雪だったが、日が高くなるにつれ温度が上がってべとべとしてカンジキにくつき閉口する。支稜はさほど広くなく木の枝などでやや歩きづらいもののそう悪い所はない。雪洞地点からは我らがHeimat北アルプスが望まれる。天気は下り坂か?

3月8日(木)T3→T4(東北尾根・1869m手前付近S H)

(朝、晴れているが小雪舞う。北の方に雲。-10°C)6:40発(-8°C)→7:25~:35(晴小雪)→8:30~:40△1871.6少し下、はからず写真4・5(頭上ののみ晴、小雪、上空積雲は北々西から)→9:30~:45L1東北尾根上に出る(晴小雪)→10:35~:45(薄日小雪)→11:30東西に細長いコル状地形、風強まりヤッケ着る(雪風力4北)→12:15~:30L2地図上の池の近く(雪風力3北-6°C)→13:30T4・1869m手前付近(雪風力4北-5°C)雪洞掘り~15:30

◆支尾根を抜けるまでもう少しと思えたが雪が深い上傾斜が強くラッセルがはからず1ピッチで100mも上れない事さえある。東北尾根上に出ると傾斜は緩く広いシラビソ林の中を上ったり下ったり、スキーで歩けたらどんなにはかどるだろうと思う。昼前から風が出て吹雪始め、早めに雪洞掘りにかかる。樹林帯の利点としてシートの下にシラビソの小枝を敷くと暖かく乾いた生活ができる。夕食はあったかい白いご飯に納豆をかけて、これが素敵においしいのですが、尾崎君は関東の人なのにこれが全くだめ、事前調査が足りず気の毒な事をしました。

3月9日(金)午前中半沈、午後T4→デポ地(△2168.7m手前のコル)→T4

4時起床(雪風力4北々西-5°C)朝食後風雪のため沈殿。 午前中雪洞改造(写真6、キジ場付きに) 11:30昼食 13:00天气回復、デポに出発(快晴風力2北西) → 13:50~14:00(快晴風力1北西) → △2083で本来の東尾根に合流 → 14:30~:50サブ谷乗越(快晴風力2北)ここから牧瀬・尾崎は雪洞へ引き返し市野・三坂は更に先に進む。写真7 → 15:35~:45南白山△2168.7手前のコル。ガソリン・食料の一部をデポ → 16:50市野・三坂 T4雪洞帰着(快晴-8°C)

◆沈殿を決め込んでいたら昼頃から絶好の春山日和に。深雪の中、重荷を担ってのラッセルがはからないという今までの体験から多少でもデポする事にする。ようやく本峰が大きく望まれ、今自分達が白山の一隅にいる事を実感。サブ谷乗越と名付けた広いコルは軟雪が吹き飛んでカリカリにクラスト。輪カンジキだけで出かけたため一年生二人は雪洞へ引き返し、上級生だけで更に先までデポ地点を伸ばした。帰途は夕暮れ近づく中、冬山のような追われるような切迫感もなく春の黄昏を楽しみつつ快調にトレールをたどってSHにもどる。Berg Heil!

(一年生だけでの行動が少し気にならない事もないが、天気もいいし危険な所もないしトレールもしっかりついていたので問題はなかったと判断。)

3月10日(土)T4→T5(油坂峰SH)

6:10発(曇上方ガス-10°C) → 7:00~:10サブ谷乗越(雪風力2南々東-9°C)
→ 7:45~8:00デポ地点デポ回収 (にわか雪風力2南々東-9°C
上空高積雲は云々から) → 8:45 L1南白山のひとつ先のピナクル。下りルート工作(にわか雪風弱く日差し暖か。上空高積雲は云々から) ~ 10:05通過終了 → 10:55~11:10 L2(曇風力3北日差し暖か) → 12:30~:45別山直下(晴)

少しガス)—— 別山△2399.4(時刻不明。この間記録欠落)——→
(時刻不明)油坂峰2256(曇)ガスが出てきて下り坂と判断、少し早めに峰の北面
に雪洞を掘る。

◆きのうのトレールがそのまま残っていたのでデポ地点まで快調。ルート
中唯一の岩峰は雪が着いていて予想していた程ではなかった。待望の主
稜線にでるとアイゼンがよく効いてはかかる。・2342峰から先やや複雑
な狭い稜線だが、ちょうど今朝のSHからずっと続いていたキツネのもの
らしい足跡がみごとに正しいルートを教えてくれた。その野生の能力
は神秘としか言いようがない。それにしても雪以外何も無さそうなこの
高所でどうやって生きているのだろう。高度が上がり雪洞も乾いて快適
な居住空間となる。雪洞での不快な体験もあるがこれだからやめられない。
天候はその後又回復、出入口の正面間近に主峰を望む。

3月11日(日)T5→T6(大汝峰南稜SH)午後半沈

6:10アイゼン着けて出発(快晴風力4西-9°C雲海)——→7:00~:10△2244
写真8 ここから一旦稜線を離れ南竜ヶ馬場2070mまで下り、雪から顔出して
いる建物セントラルロッジの裏あたりの尾根を上り室堂平へ)——→
9~10頃(時刻不明)室堂平L1、センターと冬季小屋(白山荘)だけ雪上に出ている
(快晴西風強し)ソリでちょっと遊ぶ。よく滑り有効 写真9・10——→
10:30ようやく頂上(御前峰)に立つ(薄曇日暈風力4北)写真11・12——→
11:15大汝峰南稜末端付近でSH掘る(薄曇風力3北々東)

◆大汝峰を越える予定だったが全員疲労が溜まっているので休養のため半
日で行動打ち切る。上空に薄い雲が広がって来たが頂上からの展望はす
ばらしく、延々と歩いて来た長大な尾根や稜線がよく見え感動一入。

3月12日(月)T6沈殿

夜半雪洞の入口埋まり除雪。いつものように4時起床朝食。外は風雪、沈殿。
天気が悪くなると思わず、つい掘りやすい大きな雪庇状の所に掘ったが、
雪が降れば当然風下側に吹き溜まり入口が塞がれる。たびたび除雪を余儀
なくされる。失敗だった。

3月13日(火)T6沈殿

夜中1時と3時に除雪。 7時朝食。 週間天気予報出る(14・15曇→
16曇→雨17曇・晴18曇・雨19曇・晴)一日中風雪ガスで全く視界なし。気温比較的高め。

3月14日(水)T6沈殿

今日こそと4時起床朝食後待機するも回復せず。沈殿3日目ともなると休養どころか、いい加減里の人、里の食い物が恋しくなる。夕方になってようやく雪止みガス去る。高めの雲海。風強く気温下がってくる。明日はよくなるだろう。うずうず。

3月15日(木) T6→T7(妙法山手前 S H)

食事当番は3時半起き。5:55発(曇風力4北々西-14°C下の雲海と上空をべったり覆う高積雲との間にいる)—— 大汝峰山頂から稜線を東に少しだったあたりから右下の小白水谷源頭(夏のヒルバオ雪渓)に下りる。風下側なので多量の積雪があって危険だと予想していたが意外にも風で飛ばされてクラスト安定。——→6:50~7:00仙人谷のコル—— 北弥陀が原でスキーをかついでアイゼンはいた3人パーティーとすれ違うもったいない——→7:50~8:00うぐいす平(曇風力3北西)—— 間名古の頭は夏道あたりは風上側であまりもぐらんないだろうと踏み込んだが、樹林の中でルートを見失った上、結構雪が深く途中アイゼンとカンジキを何度もはき替え手間取ってしまった。急がばまわれ! —————→0:40~:55 L1ウサギ平・2041手前——→11:40~:50・1845先の小谷降り口(曇風力1北日暈)併用していたアイゼンはずす—— この先△1786.5は通らず蛇谷源頭に下り夏道付近から北方稜線に戻る——→13:15~:30 L2[写真13]—— 13:50妙法山手前のコルへ下りるあたりS H掘り~15:20(曇-7°C後ガス)
◆真冬はどんなか知らないがさすがに春になると稜線上は思ったより雪が落ち着いた所が多く歩きやすい。しかし一方北方稜線は上り下りが多い上、標高が下がって春の日差しにあぶられないと、長期休養の効果はどこへやらえらく疲れる。天気もいいし先の見通しもついたので今日は半日行動。

3月16日(金) T7→T8 (馬狩集落はずれ雑木林)

3:30起床 5:45発(晴風力2東北東-11°C)——→6:15~:30妙法山△1775.6(日の出快晴風力2西)アイゼンに履き替え。—— スキーがあればどこでも歩けそうな所。切れた東側眼下にダム。——→8:30~:40 L1野谷荘司山△1797.3[写真14]—— 三方岩岳は西側を巻き気味に上り北面をトラバース気味に東側に下る[写真15]——→10:45~11:15 L2(快晴)昨秋確かにあった小屋付近。多量の積雪の下か見当たらないので更に下る事にする。—— 13:05~:20休 —— ほぼ夏道沿いに下り、左にスーパー林道を見ながら更

に尾根の延長のブナ林の急斜面を下る。雪がくさってカンジキがもつれる人もいました。下り切ると白谷の水辺の林道に出て何日ぶりかで「水」に再会(快晴風力1北東)——林道上はあまりもぐらないので、延々かつてできた我らがスキーを組み立ててソリに仕立て荷物を乗せるとようやく本領発揮時には滑り過ぎてブレーキさえ必要な程。写真16~18—————

14時ごろT8馬狩集落の少し手前の雑木林にツェルトを張り最後の泊まり場とする。(快晴→曇小雪→快晴)

◆まだ予備日数もあるし先の見通しもついたので今日は三方岩岳の小屋泊まりを予定していたのに影も形もなく勢いで下ってしまったものの稜線から一気に街に出てしまうのが何だか惜しいような気がするもので、里のすぐ近くだがツェルトを張った。

3月17日(土)T8→松本

3:30起床 5:20発(曇風なし)—————車道をテクテク歩いて早朝の荻町
バス停6:20着(にわか雪)6:57発—————(暖かいバスの中から窓外を眺めていると道辺に落のとうや猫柳の芽吹きが通り過ぎて行きいかにも春らしい幸福感)—————→美濃白鳥駅9:25着(なんと列車は13:17までない。他の方法を調べてバスで行ける所まで行くことにする)9:58発—————(岐阜バス140円)—————
→郡上八幡—————(300円)—————11:39美濃市12:25—————12:50美濃太田13:??—————
→13:40多治見14:32—————18時ごろ松本着

◆里におりると岳人は要領を得ない。交通事情が調べて行ったのと違っていて右往左往したが、まずは一件落着。無事帰着できた事に感謝。大きな事を成し遂げた充実感といつもの空腹感、心地よい疲れ。

☆総括

積雪期の白山は、手元の資料も少ないし、4月末以後のいわゆる残雪期以外は容易には近寄り難いと思っていた。実際三日間吹雪に閉じ込められたが、白一色の世界で視界がない時、このようになだらかな地形の所では少々地形を記憶しているぐらいではへたに動き回るのは危険さえある。厳冬期はめったに晴れる日のない地域なので、やはり時々晴れ間の訪れる春まで待つべきだろう。今回の市野氏の提案があった時、渡りに船という気持ち半分。一方その計画の大きさ、未知の地域がかなりある事、更には一年生二人を連れてというアンバランスなメンバー構成を考慮すると、最初は正直な所大丈夫かいなと思った。いざ実行してみると、難しそうだと見ていた箇所は案外それほどでもなく稜線

上は幸いほとんどアイゼンで歩けてこれも予想以上にはかどった。キーポイントはやはり天候と深い積雪という事になる。あとは一步又一步着実に歩を進める努力と四人で力をあわせてやり抜く意志があって事が成就されたということです。全員スキーを使えればよりスピーディーで楽しい山行が可能でしょう。

(記:三坂)

◎この記録は、当時資料がそろわなくて発行がのびのびになり、その内資料自体所在不明になって発行できぬままそれぞれ卒業、心の片隅にほんのわずかながらひっかかりながらも日の目を見ぬままになっていました。かくて22年の歳月が流れ、最近になってようやく故郷に定着した不肖それがし、牧先輩の思いがけない死に出会い我が身も又老い先短い身である事を悟らねばと思う今日このごろ、ふとそれを思い出して古い荷物を整理していたら、ありました! 当時、神戸で社会人となった市野氏からまだ学生でいたそれがし宛に届いた写真と、自分自身のメモ帳が。これをもとに、既にはっきりしない部分の多い当時の記憶を掘り起こしたり、写真と地図から撮影地点を推定しながらようやくここに遭ぎ着けたという訳です。もちろん記憶違いもあるし、余裕がなかったのか記録が抜けた部分もあるのでそのつもりでお読み願います。

(既定版6音)

(1995年 師走 金沢にて 三坂記)

筆
心
(昔の名前=健次)

◎写真は別冊付録。(これにはついてしません)